

発掘成果のまとめ

- 推定東山道駅路
 - ・安中市内では初めての発見。
 - ・8世紀前半頃には道路としての機能が廃絶し、別の場所に移設される。
 - ・国府ルート成立前の初期の東山道駅路である可能性が高い。
- 総柱建物・大型掘立柱建物
 - ・大型掘立柱建物と総柱建物は軸を合わせて建てられており、8世紀前半頃に同時に機能していた建物と推測される。
 - ・総柱建物には地業と呼ばれる建物の基礎工事が行われており、その上には礎石が置かれていたと推測される。
 - ・総柱建物の屋根には瓦が葺かれていたと推測される。
 - ・どちらかの建物の壁が漆喰壁であった可能性が考えられる。
- 瓦廃棄土坑
 - ・奈良・平安時代（8世紀から10世紀までの期間）に掘られた建物の建材等を廃棄するための土坑。
 - ・瓦などの建材は基本的に西側の総柱建物跡の方向から流し込まれている。
 - ・下層からは建物の壁材に使用したと考えられるスサ、粘土、漆喰の層が検出した。

今後の課題

現在の安中市とほぼ同じくする地域は飛鳥・奈良時代（7～8世紀）には碓氷郡（飛鳥時代には碓氷評）と呼ばれ、郡（評）には郡家・評家（古代の役所）が置かれました。町北遺跡から北へ約300mの距離に植松・地尻遺跡が所在します。この遺跡の発掘調査では「評」と刻まれた須恵器が出土しており、飛鳥時代の評家や郡家の推定地とされてきました。

町北遺跡での発見は、植松・地尻遺跡から本遺跡までが古代の役所のエリアだったことを示しており、従来の想定を裏付ける新たな鍵となります。

今回、初めて発見された推定東山道駅路がその後どこに移設されたか、という課題も含め、古代碓氷郡の中心地の解明を進めてまいります。

区分	西暦	町北遺跡と周辺で起きた主な出来事	
飛鳥	600	推定東山道駅路 道路の廃絶・移設	秋間丘陵で須恵器・瓦の生産が供給
	700		山王廃寺の建立
奈良	700	植松・地尻遺跡で公的施設が建てられる→碓氷評家か	総柱建物・大型掘立柱建物の建築
	800		上野国府の成立 東山道国府ルートの成立
平安	800	建物としての機能の停止？	廃棄土坑の形成 建物の建材の片付け
	900		弘仁の大地震

= 推定東山道駅路
 = 大型掘立柱建物
 = 総柱建物
 = 廃棄土坑
 = その他の出来事
 = 確定
 = 推定

町北遺跡 現地説明会資料



町北遺跡の位置と周辺環境



町北遺跡の周辺環境

町北遺跡は九十九川と碓氷川という二大河川に挟まれた台地に位置しています。

原市・安中台地とも呼ばれるこの台地は、九十九川、碓氷川の河床面まで比高差20mと、急峻な断崖に囲われています。また台地面は南北に600m程度の広さしかなく、東西に横長の台地となっています。

安中市は古代東山道・近世中山道・近代の信越線・現代の国道18号など、関東と北信越を繋ぐルートが各時代で開通してきました。このうち、東山道、中山道、国道18号は原市・安中台地に通っており、本遺跡の所在地が、安中市の歴史にとって重要であったことがわかります。



町北遺跡の概要

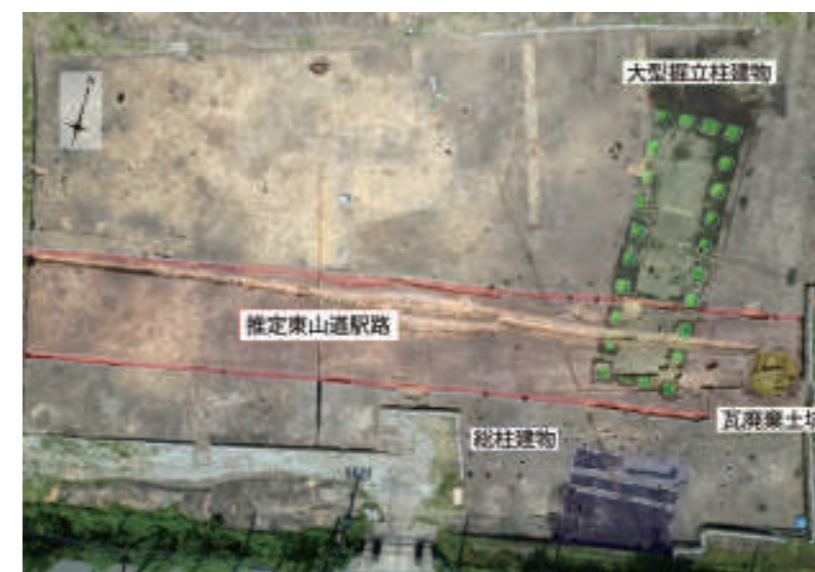
今回の発掘調査は、市庁舎建設工事に伴い、庁舎建設予定地である旧安中高校校庭を対象に実施しました。

調査の結果、飛鳥時代（7世紀）まで遡ると考えられる推定東山道駅路が発見されました。

これまで、東山道が安中市内を通過していたことはわかっていたのですが、遺構としての発見は今回が初めてとなります。

また、東山道駅路とあわせて、奈良時代（8世紀）に建てられた公的施設に関連する大型建物2棟を発見しました。

このうち北側の建物は、東山道の北側側溝を一部壊して建てており、この時には道路が廃絶され移設されたことが明らかとなりました。



町北遺跡の遺構配置

すいていとうさんどうえきろ
1. 推定東山道駅路



推定東山道駅路（東から西へ向けて撮影）



東山道南側側溝（掘削後）

町北遺跡では東西方向に走る道路遺構を発見しました。道幅は約10mあり、道の両側には幅70cm程度の側溝が掘り込まれています。側溝は一定の間隔で深さが異なる造りをしており、溝の断面形状もY字やU字になるなど場所によって様々な掘り方をしています。

この道路遺構は8世紀前半頃に造られた大型掘立柱建物に壊されていることから、8世紀前半以前に機能していた道路であることがわかります。

道路規模や側溝の造り方など群馬県内ですでに発見されている東山道駅路と共通点が多くあり、推定される時期などから7世紀に整備された東山道駅路の可能性が極めて高いと判断されます。今後、道路の開通時期や8世紀以降の東山道がどこに移されたのかが、課題になります。

おのがたほったてばしらたものあと そうばしらたものあと
2. 奈良時代の公的施設（大型掘立柱建物跡、総柱建物跡）



大型掘立柱建物跡（北から南へ向けて撮影）



大型掘立柱建物跡の柱穴

総柱建物跡の北側に位置する本建物跡は梁行3間（7.5m）、桁行9間（27m）の大型掘立柱建物になります。

各柱穴は約1m四方あり、大きな柱が建てられていたものと考えられます。また柱穴の内側にも、いくつか小さな柱穴が見つかり、建物内部を仕切るための柱があったことが想定されます。

本建物は南側の総柱建物跡と軸が合うことから、2つの建物は同時期に機能していたと考えられます。また1/3が東山道駅路内にまで及んでいることから、東山道を廃絶した後に建物が建てられたことがわかりました。



総柱建物跡（北から南へ向けて撮影）



総柱建物跡の版築（南端部分）

大型掘立柱建物の南側に位置する本建物跡からは、地盤と呼ばれる建物の基礎が発見されました。基礎は長方形に地面を掘りくぼめ、その中に河原石と土を充填して造られています。版築工法が採用されており、基礎部分は固く叩き絞められていました。

本来であれば、基礎の上に礎石が置かれていたと考えられますが、礎石については発見できませんでした。建物の想定される規模や基礎工事を行っている様相から、当時の重要な公的施設と推測され、北側の大型掘立柱建物跡と軸がそろうことから、同時期に機能していた建物であったと推測されます。

かわらはいきどこう
3. 瓦廃棄土坑



瓦廃棄土坑 検出作業風景（東から西へ撮影）



土坑内下層の建材検出状況



建材（白色粘土）断り割り断面

調査区の東端、東山道駅路の真ん中に約4m四方、深さ1.6m以上の土坑を発見しました。本土坑からは8～10世紀までの期間に造られた須恵器が見つかり、この期間に機能していたと考えられます。

土坑には大量の瓦が廃棄されており、瓦の多くは8世紀前半頃に造られたものであることがわかってきました。また、廃棄土坑の下層からは建物に使用されていたと考えられる白色粘土などの建材が層上に堆積している様相が確認できました。

これらの建材は西側から土坑内に流し込まれており、西側の建物に使用されていた可能性が高いと考えられます。現状ではどの建物に使用されていたかは断定できませんが、建物の往時の姿を知るための貴重な手がかりとなります。